泉山山頂に山小屋完成す

山岳部員の長年の望みであると共に津高生の望みでもある泉山ヒュッテ建設も、地元青年団、婦人会の協力を得て峻峰で名高い泉山山頂にその勇姿をあらわした。実際建築にあたった部員の一人にその建築経過を述べてもらった。

うっすらと朝もやの立ち込めている十月二十八日の早朝、われわれ一行七人は手に鎌、シャベル、鍬等を持ち一番のバスへ乗り込んだ。今日の仕事は従来の頂上廻りのハイキング・コースよりずっと短距離の直接ヒュッテ建設予定地へ出る資材運搬用の新ルートをつけることである。これはすでに先週の土、日曜に試みられたが失敗に終わったものである。やがて大町へ到着した。皆それぞれの道具を肩に登山口まで一里たらずの村道を歩いた。そこからは従来の道とは逆の方向に泉の出る辺りを目指して一途に登りに登った。途中いたる所で背丈ほどもある熊笹に出会ったり、傾斜の四十度ほどもある、這わなければ登れないような急坂に出くわしたりした。皆はそれぞれ笹を切ったり鍬で道を削ったり、道標を立てたりしながら一歩々々目的地へ近づき、午後二時半頃やっとヒュッテ建築予定地から約二百メートルはなれた地点へ出て、念願の最短ルート新設に成功した。山上で数時間休憩した後山を下ったが、最後のバス迄に余り時間がなかったので少し緩慢になった山道を走り下りしていたら、途中で十六貫のＹ君が膝を捻挫してしまい、そこから大町までの一里余りの道を上級生がやっとの思いで（失礼）背負って行ったところ、案の定バスに乗り遅れ、お陰で帰りは乞食のような恰好で、津山までタクシーとしゃれこんだ。十月三日運動会の翌日、我々山岳部員は泉山ヒュッテ建設のためにいさんで津山を出発した。この日は木材を山頂まで運搬するのである。津高生徒二十数名、それに地元青年団十数名協力して下さって麓の中林から運搬を始めた。一人々々自分に合った荷物をかついで建設予定地めがけてヒュッテ建設のために開拓された新ルートをぐんぐん登っていった。第一日は始めてだったのであまり進行せず、十月四日第二日は皆すこしはなれて来たので運搬完了。第一日目は地元の人々のおすすめで下の民家にとまる。十月五日第三日、今日いよいよ山小屋建設にかかる日なので皆いさんで出発。スコップを手に土を掘るもの、鎌を手に熊笹をかるもの、それぞれ一生懸命に働いている。本校の梶尾さんも出てこられて一本々々の木材を組み合わせてついに棟上完了。棟上式の皆の顔は大変うれしそうに輝いていた。ほんとうにこれほどうれしかったことはなかった。くぎをうつ音が山々にこだましてなんとも形容しがたい。すこしの時間があったのでトタン屋根をうち三日間をすごして来た泉山に別れをつげて午後七時着の最終で帰津。山元先生ほか三年生数名は泉山に投宿。翌日六日の一番のバスで帰津。十月十九日中間考査の前でもあるので部員数名が山小屋監視に登頂。十二月二日中間考査もすんでほっと一息いれた二日、山小屋を完成するために、十数名が登頂。今日は少しの木材を運搬しあった。昼過ぎに山小屋に到着。さっそく壁板打ちに着手。もう少しで完成だ。その日は、民家にやっかいになった。十一月三日、早朝煙ぬき等をかついで出発。十時すぎ到着。この日は女子部員も十一時頃着。最後の仕上げに力を入れた。煙ぬきをつけ炉をきり、戸をつけて遂に完成。山上でささやかながら完成式を行って一同山小屋に別れをつげながら山をおりた。地元では婦人会、青年団の協力で本校からは部長の石井先生その他二、三の先生、鏡野町長、部落長、青年団の人々の出席で盛大な落成式が行われた。その後キャンプ・ファイヤーをして別れを惜しみながら貸切バスで帰着した。本当に楽しい山小屋建設であった。

「昭和３３年１１月２５日　発行
成美学園新聞　第５５号　記事」より全文